九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[032]九州大学大学文書館ニュース

https://hdl.handle.net/2324/2203008

出版情報：九州大学大学文書館ニュース. 32, pp.1-, 2009-03-31. 九州大学文書館
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ISSN 1881-3496

九州大学
大学文書館ニュース

第32号　2009. 3. 31

目　次

九大水泳部の創設と活動……2
宮崎演習林の設置と柳田国男ゆかりの人々…4
九州大学大学文書館委員会名簿……8
九州大学大学文書館名簿……8
大学文書館日誌抄録……8

「京都帝国大学福岡医科大学学友会役員」（1907年）

九州大学学友会の歴史は長い。写真は九州帝国大学の前身である京都帝国大学福岡医科大学学友会の役員達である。明治36年（1903）11月に創立された学友会は芸術部と運動部からなり、運動部にはテニス科、弓術科、撃剣科、柔道科の各科があった。3年後の明治40年2月には「科」を廃して「部」とし、雑誌部を開始した。会長は医科大学長の大森治豊、各部長は医科大学の教授等（前列左から、雑誌部長久保猪之吉、弓術部長榊保三郎、端艇部長宮入慶之助、庶務部長森春吉書記官、大森会長、弁論部長林春雄、庭球部長旭憲吉、水泳部長中金一、撃剣柔術部長後藤元之助）で、後列は学生委員である。因みに、次頁以下（川波洋一「九大水泳部の創設と活動」）に詳述される九大水泳部は、この福岡医科大学時代の明治37年9月に新たに加えられた「水泳科」の伝統を引き継いだものだと思われるが、同大学時代は学内にプールが無く、練習は大学裏手、千代松原沖の博多湾内で行われていた。

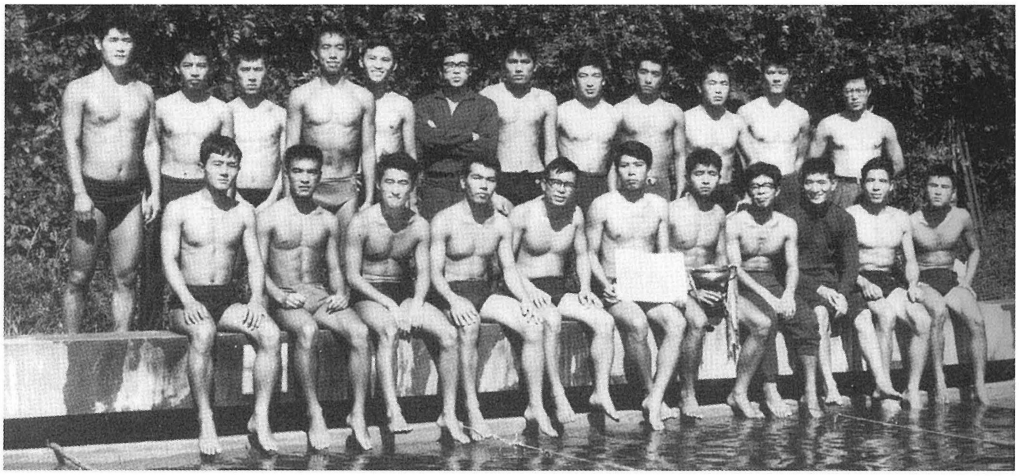
九大水泳部の創設と活動

川　波　洋　一

九州大学体育総務委員会発刊になる『嵐雲』第２号によれば、九州大学におけるスポーツサークルとしての水泳部の活動は明治37年の水泳科、明治45年の水泳部の創設によって始まったとされている[1)]。しかし、大正15年に農学部農芸化学科に入学された大村収氏（昭和４年卒）によれば、同年法文学部に入学の安永徳隆氏（昭和４年卒）とともに、農学部農芸化学科満田隆一教授に依頼して水泳部長にご就任いただき、併せて水泳部の組織化に着手されたということである[2)]。水泳部誌『千里蹴波行』の名簿欄によれば、もっとも古い卒業生は、桜井文一氏（昭和２年医学部卒）、続いて大村氏、安永氏、石橋順二氏（昭和４年法文学部卒）となっていることから、九州大学における水泳部としての本格的な活動は、昭和のはじめ頃に行われるようになったと言ってよいであろう。社会経済情勢は現在と同様の危機の時代であったが、スポーツの世界では、昭和３年（1928年）のアムステルダム・オリンピックにおいて鶴田義行の活躍が見られ、国内においても旧制高校や、帝国大学を中心に盛んに競技会がおこなわれていた時期に当たる。九州大学における運動部としての組織化と本格的活動の開始年を明確に資料において確認することはできないが、先輩諸氏の記憶と記録によれば、九大水泳部は少なくとも80年の歴史を刻んできたということができるであろう。また、所属部員の記録についても正確を期すことは困難であるが、通算して800名前後のOB、OGを擁するスポーツサークルである。

九大水泳部とプール

水泳部の活動開始とともに部員達が熱望し、一番力を入れたのは、プールの建設であった。コンクリートの世界的権威であった吉田徳次郎工学部教授の指導下、昭和４年秋に、工学部構内の松林のなかに待望の25メートル、７コースのプールが完成したのである。したがって、水泳部としての活動の初期においては、このプールは存在せず、昭和２年完成の福岡県営大濠プール、同３年完成の修猷館プールなどで、練習、競技を行っていたものと思われる。このプールは、神宮プールなどと同様に、現在のプールのようにスタート台が一段高くなっておらず、フラットであった。また、水球競技にも使えるようにとの配慮であったと思われるが、プールの真ん中からスタート台側が一段と深くなっており、顔を出した状態で足をプール底につけて立つことはできなかった。現在は、一段深かった部分を埋め戻してしまった。筆者が現役部員であった昭和40年代後半は、この一段深い部分は残っており、練習の後、このプールでよく水球に興じたものである。現在は残り少なくなったが、プールは松林に囲まれ、水しぶきに松風を感じながら泳ぐことができた。夕闇のなかでの練習では、松枝に月がかかるのを眺めながら泳



西部国公立大会優勝記念（1965年。於九大プール）

ぐこともあり、何ともいえぬ風情のあるプールだったかもしれない。また、プールの土台を形成する石垣には藤が植えられ、もっとも激しい練習を行っていた5月頃には、薄紫の花が部員達の眼を和ませることもあった。いまこのプールのそばに立って見れば、改めてそのような特徴に気づかされる。現実には、厳しい練習に明け暮れる部員達にとっては、そのような風情を楽しむ余裕もなかったかもしれないと思いながらも、苦しかった練習とともにやはり想いが帰っていくのは、このプールの持つ優しさである。

部誌『千里蹴波行』のこと

九州大学水泳部は、年1回発行の部誌『千里蹴波行』を持つ。同誌は昭和34年に第1号が発行されているが、その中心的存在は現在経済評論家として活躍の三原淳雄氏（昭和34年経済卒）であった。第1号発刊の苦労話は、『千里蹴波行』特別号に寄稿された同氏の「千里蹴波行の生まれた頃」に詳しい[3]。3年生になってから入部しマネージャーとして活躍した三原氏によれば、部誌を創ることによって先輩諸氏に寄付を募ることが発刊の眼目であったということである。部の活動そのものは弱体化しており、予算も削られる傾向にあったので、苦肉の策として誕生したのがこの部誌であったというわけである。予算が限られたなかでの発刊であったので、ガリ版刷りの8ページほどのものであった。第2・3号は品川満氏（昭和36年文卒）、第4号は高田俊生氏（同36年法卒）の尽力によって名簿などの整備がなされ、内容的にも充実が図られていったのである[4]。昭和34年（1959年）の第1号から平成19年（2007年）発行の第48号までが発行されており、大学におけるスポーツサークルの活動記録としては貴重なものということができる。内容は、時とともに変遷するが、部長言、先輩からの寄稿、練習風景、合宿余滴、大会記録、名簿などから成っている。九州大学のような総合大学において、それぞれ専門分野の異なる学生が互いに交流を持つ機会として、スポーツあるいは文化系のサークルの課外活動は貴重である。それぞれ専門が異なり、年齢の離れた若者が、体力と気力がもっとも充実し、そしてもっとも飢餓感にあふれた人生の一時期を厳しい練習に明け暮れながらともに過ごすことは、共通体験として一生消えることのない財産となるであろう。そうしたさまざまな部員達の想いが詰め込まれているのがこの部誌である。またこの部誌は、必ずしも同じ時間を共有することのなかった先輩後輩たちを結びつけてくれるという効果もある。そのような意味で、この部誌は、水泳部に関わった人たちを結びつけてくれるシンボリックな存在であるということもできる。最後に、部誌名の由来に付言しておきたい。「千里蹴波行」とは、在学4年間のうちに千里すなわち4,000kmを泳ごうという意味であるとは、筆者が現役時代に先輩から聞いた話である。4年間＝1460日のうち、4月から7月のシーズン中のみ泳ぐことができるとして、土日も含めて練習したとしても実際の練習時間は500日足らずである。500日で4,000km泳ぐとすれば、一日8,000m泳がなければならない。土日を含めて毎日8,000mを泳ぐのは至難の業である。千里波を蹴って行くことに目標を定め、これを部誌名に冠した先輩たちの気概に思いを馳せながら、後輩たちもこの目標にぜひ挑戦してみてほしいと思う次第である。

九大水泳部の練習風景

水泳部での練習は、シーズン中ほぼ工学部のプールで行われた。主として教養科目を受ける時代（1および2年次）は、旧教養部の六本松キャンパスプールで行われていた。このなつかしい六本松キャンパスの授業も平成21年4月から伊都新キャンパスに移ることになっている。六本松在籍学生は、土曜日並びに強化練習、合宿時に箱崎の工学部プールで合同練習を行った。練習は春先から始め、5月の連休時に強化練習、6月の九州国公立大会前に第一次合宿、そののち第二次強化練習、7月の国立七大学戦前に第二次合宿というのが昭和40年代後半から50年代にかけての基本的な練習スケジュールであった。合宿時には、学内に泊まり込み、早朝練習、午前・午後の泳ぎこみ、夜間練習を行うことがあった。この時期には、一日10,000メートル以上泳いでいたはずである。シーズンが終了すると、秋および春先には九重の九大山の家または研修センターで陸上トレーニングを主体とする合宿を行った。この秋春合宿を経験した水泳部員ならば、当地の九重、大船、三股、湧蓋、星生といった山々に登った経験を持っているはずである。これはランニングと山登りが主体の合宿であった。時に、ソフトボールとバットだけ持参し、湧蓋山の麓でソフトボールに興じることもあった。また、春先の合宿において豪雪に見舞われ、危うく遭難しかけた経験もある。だが、透きとおるような青空に映える霧氷を見たのもこ

の時であった。冬は主としてランニングやウエイト・トレーニングを主体とする陸上トレーニングであったが、練習そのものはそれほど体系的・組織的なものではなく、個人練習に近かったのではないかと思われる。市内において室内プールが比較的容易に利用できるようになると、冬場から早春にかけての練習は、室内プールを借りて行われることもあった。利用できる施設の充実のみでなく、九州大学の移転そのものによって、学生たちの主たる活動地は伊都に移り、練習方法も市内の施設を利用せざるをえなくなった。大学のメインキャンパスが伊都に移転しても、水泳部にとって待望久しい本格的な50m長水路プールの実現は遠い先のことであり、今しばらくは市内諸施設での練習が続くことになる。時が移り、場所が変わっても、あのプールや部室で同じ時代を過ごし、練習に明け暮れた事実に変わりはなく、プールや部誌を通じて、部員の心は一つにつながっているといえよう。

〔注〕

1）永末秀一「水泳部変遷史」（九州大学水泳部『千里蹴波行』特別号）平成12年、37頁。
2）大村収「水泳部創設の頃」（九州大学水泳部前掲誌）、40頁。
3）三原淳雄「千里蹴波行の生まれた頃」（九州大学水泳部前掲誌）、34頁。
4）高田俊生「つらぬく棒のごときもの」（九州大学水泳部前掲誌）、79頁、祝宏嘉「ひとはわれをやましという」（九州大学水泳部前掲誌）、81頁。

（九州大学大学院経済学研究院長/水泳部部長）

宮崎演習林の設置と柳田国男ゆかりの人々

西　村　潤　二

1．はじめに

九州大学宮崎演習林庁舎の玄関前に、２本の「高野槇」がある。1943年（昭和18）旧庁舎の落成記念に荒川文六総長、田中義麿農学部長、西田屹二演習林長が来演された際に、３本植えられた。しかし、1973年（昭和48）現庁舎に建替えられた時に支障となり現車庫のあたりに移されたが、うち２本は移植がうまくいかず枯死し１本のみとなった。そして、1987年（昭和62）現車庫を新設した時に、再度玄関前に移植された。これが、現在植わっている２本の中の１本である。もう１本は、1989年（平成元）の創立50周年記念に高橋良平総長が来演された際に植えられた。

これらの「高野槇」は、宮崎演習林が研究教育機関として、大きく、まっすぐに成長、発展してほしいとの思いから当時の総長達によって植樹されたものである。「高野槇」は、コウヤマキ科種で１属１種の日本固有種。ヒマラヤスギ、アロウカリアとともに世界三大造園木の一つであり、成長すれば樹高30m、胸高直径１mに達する常緑針葉樹である。３年前、秋篠宮家悠仁親王のお印とされたことでも知られている。

九州大学宮崎演習林は、現在で言うサハリン、朝鮮半島、台湾、早良、糟屋に次ぐ７番目の演習林として、1939年（昭和14）宮崎県東臼杵郡椎葉村（当時は西臼杵郡）に設置され、今年で70年を迎える。宮崎演習林が既設の６演習林と異なるのは、その設置の経緯にある。他の演習林がすべて当時の監督官庁からの移管或いは無償貸与という形で設置されたのに対し、宮崎演習林は椎葉村大河内の民有林を購入して設置された。なお、1949年（昭和24）設置の北海道演習林も当時の大蔵省からの移管である。このように宮崎演習林はその設置にあたり地元行政諸機関の協力は無論のこと、山林の提供、現地事務所の開設等において大きく地元地域住民の協力を得ている。

これより約30年前、1908年（明治41）７月、まだ交通手段のなかった椎葉村を徒歩で訪れ、一週間ほど滞在した政府の役人がいた。その名前は柳田国男。来訪当時は、法制局の参事官という肩書（民俗学の創始者とよばれるのはずっと後年のこと）で、５月末～８月の３ヶ月に及ぶ九州、四国視察旅行の途中であった。

昨年７月、この柳田国男の椎葉来訪100周年を記念して「柳田国男100年の旅」という催しがあった。これは、彼が椎葉を訪問した100年前と同じ季節、同じルートを辿り、投宿した当時の姿を残す庄屋屋敷跡などゆかりの地を訪れ、ゆかりの

人々や狩猟や焼畑文化など語り継がれてきた話に触れながら、椎葉の暮らしや伝承文化の奥深さを体験しようというものである。筆者はこの催しに参加した者の一人であるが、柳田国男と直接関わりを持った椎葉村の人々やその子孫が、本学の演習林設置にあたって、いかに多大な貢献をしてきたかという知見を得るにいたった。

本学の演習林設置に際し柳田国男ゆかりの人々がどう関与し、また今回の「柳田国男100年の旅」との関わりについても述べてみたいが、その前に、宮崎演習林がこの地に設置されるに至った経緯にふれておきたい。

宮崎演習林事務所（1958年）

2．九州大学演習林の歴史

九州大学演習林は、本学の開学の翌年、大学における基本財産林として、1912年（大正元）サハリン及び朝鮮半島に設置されたのを始め、翌1913年（大正２）には台湾演習林が設置された。1919年（大正８）に農学部が設立され、1922年（大正11）の林学科発足に伴い、大学演習林は農学部附属演習林となった。当時保有していたサハリン、朝鮮半島、台湾の各演習林はいずれも外地にあり、本学からは距離的にも遠く、学生、教官の実習林としては不便であった。そこで林学科発足にあわせて1922年（大正11）に、早良（福岡市西区）及び糟屋（現福岡県糟屋郡篠栗町及び久山町）演習林が設置された。その後、1926年（大正15）に朝鮮半島北部に演習林が設置された。

1926年からサハリンの演習林は収益を上げるようになり、1930年代には演習林は支出のほぼ倍の収入を計上するようになった。当時は、九州大学だけの独立した特別会計であり、年度末の余剰金は資金として繰り入れ、翌年度に繰越使用ができた。この余剰資金は、最初の建替時期にあった医学部の建物、設備等に例年充てられていた。

このように演習林の余剰資金は、医学部をはじめ先発各学部の建物、設備の拡充等に用いられたが、第３代演習林長片山茂樹の提唱により演習林自体の拡充整備にも充てられるようになった。その成果が宮崎演習林である。1945年（昭和20）の敗戦により海外の演習林を全て失った本学にとって、この宮崎演習林設置の意義は大きかった。

なお、本学地方演習林のもう一つの柱である北海道演習林は、戦前、サハリン及び朝鮮半島の演習林が行っていた北方林業研究成果の蓄積を活かすため、1949年（昭和24）に道東足寄町にあった旧陸軍省軍馬補充部用地跡に設置したものである。この設置時に於いても、北海道初の民選知事である田中敏文知事（本学農学部卒）をはじめとする道庁や地元行政機関及び地域住民の支援によるところが大きい。

3．宮崎演習林の設置とその経緯

宮崎演習林は、宮崎県東臼杵郡椎葉村大河内に所在する。本学は、宮崎県内にその候補地を求め、県や地元行政機関及び椎葉村地域住民の協力のもと民有地を買上げ、1939年（昭和14）に設置をみた。その設置にいたるまでの経緯については、1941年（昭和16）作成の『宮崎演習林施業案説明書』第一章第四節、第二の「演習林の沿革」に詳しい。抜粋すると、

> 偶々其の年内藤家の地上権復権料を受領するに遭ひ分割の議再興し、県より技術員の派遣を請ひ昭和十二年三月より大字大河内字本郷の土地八千余町歩の分割に着手せしが、土地広く加ふるに権利関係複雑せる為意の如く進捗せず荏苒時移りしも、演習林候補地として選定せらるるに及び大学の援助のもとに急速に進捗し、同十四年三月分割事業の完了を見るに至れり。内約三千町歩を同年三月九州帝国大学にて買上げここに当演習林の創設を見るに至れり。〈中略〉而して買上手続の便宜上一時分割委員長黒木盛衛の名義に移し之れを買上げ文部省の所管となせるものなり。

この黒木氏は、当時椎葉村尾崎在住で自身の持つ山林を提供し、かつ分割委員長として大学の山林買収に協力した。また彼は、柳田国男が1908年

（明治41）に椎葉村を訪れた際、村役場のあった桑弓野の郵便局長として、中瀬淳村長とともに柳田に応対した。柳田の椎葉６泊のうち２日目と５日目の投宿先でもあった。柳田は、３日目に大河内の椎葉徳蔵邸を訪れ、ここで椎葉氏が所蔵していた『狩之巻』と題する一冊の古文書と出会う。この椎葉徳蔵氏の子息が分割副委員長として黒木盛衛委員長を助けた椎葉善次郎氏である。東京に帰った柳田は、中瀬村長に手紙で椎葉氏所蔵の『狩之巻』を写して送ってくれるように依頼する。そしてこれを種本として翌年出版されたのが『後狩詞記』（のちのかりことばのき）である。柳田最初の著作であり、日本民俗学の出発点といわれている。

４．柳田国男と椎葉村

椎葉村は、その昔は日本の三大秘境の一つといわれ、交通手段もなく、福岡方面からの訪問者は１泊２日の行程で熊本県境の湯山峠を重い荷物を担いで徒歩で越えねばならなかった。今でも深山幽谷の鬱蒼とした山林地帯の奥深さに変わりはない。村民の生活や習慣には、今なお中世の遺風が色濃く残っている。それ故に椎葉村は平家落人の隠れ里として語られてきたのであろう。

椎葉村はこの他にも、日本最初のアーチ式ダムが完成した村としても知られている。昭和30年に完成したこのダムによりできた人造湖は、『新・平家物語』の作者吉川英治により「日向椎葉湖」と命名された。

さらに最近では、「民俗学の発祥の地」という言い方もされる。前述した1908年（明治41）に柳田国男が椎葉村を訪れ、日本民俗学の出発点といわれる『後狩詞記』を出版したことによるもので、柳田に同行した竹の枝尾の旧中瀬淳村長邸の庭には「民俗学発祥の地」の碑が立っている。

交通手段のなかった当時、柳田が、どこから椎葉に入り、どう回って、どこから椎葉を出たのか、その足跡は永い間不明のままだった。柳田の唯一の自伝ともいえる『故郷七十年』には、

> 明治四十一年には、九州と四国とに行った。五月下旬から約三ヶ月に及ぶ長旅で、内地における私のいちばん長い旅であった。
>
> 福岡から久留米に行き、矢部川を遡って肥後に入った。阿蘇から熊本、天草、鹿児島から宮崎に行き、近ごろ評判の椎葉山まで足をのばした。東京の人間で椎葉村へ入ったのは、私が最初のようにいわれたが、ともかく至る所で大変な歓迎をうけた。その時の土産が、後に珍本になった「後狩詞記」である。今日ではこれが日本の民俗学の出発点のようにいわれているが、この本はその時の旅費が僅かばかりあまったので自費出版したものであった。たしか五十部ぐらいしか刷らなかったと思う。

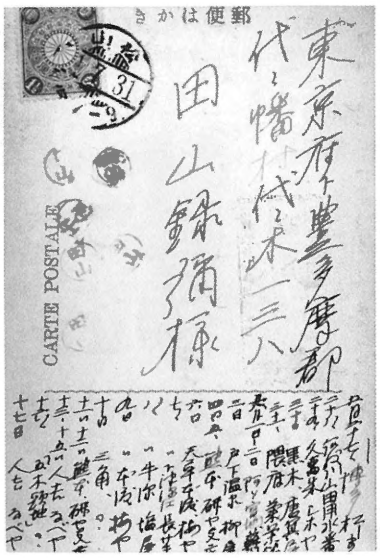
と、わずかに記述があるだけで、旅行の詳細な行程等は記されていない。柳田の九州、四国旅行の全容が明らかになるには、遠く平成の世まで待たねばならなかった。

1987年（昭和62）、群馬県館林市に田山花袋記念文学館が開館した。当時椎葉村助役だった黒木勝実氏（黒木盛衛氏の子息）は、椎葉村史の編纂に関わり、親しくしていた牛島盛光熊本商科大学教授から「柳田国男は親しい友人によく手紙を書いていたらしい。今度開館した田山花袋記念文学館に柳田の手紙が保存されているかもしれない」との示唆をうけ、同記念文学館を訪れる機会を見計らっていた。柳田は、東京帝国大学法科在学中から叙情詩を好んで作り、その縁で、後に自然主義文学を代表する作家の島崎藤村、田山花袋、国木田独歩らと特に仲がよかったのである。

1991年（平成３）、全国町村長会議に出席するため上京した黒木勝実氏は、会議終了後の７月11日、田山花袋記念文学館を訪れた。そこで１枚の絵葉書を発見する。九州、四国旅行の終わりにさしかかっていた柳田が、四国の松山から田山花袋宛に出した７月31日付け消印の絵葉書である。

それには、絵葉書の表裏にびっしりと日付と宿泊場所が書き込まれていた。５月27日の博多松島屋に始まり、久留米、黒木を通って熊本県に入る。隈府（菊池）、阿蘇を経て熊本、天草の各地を回り、この年の６月１日に開通したばかりの鹿児島本線人吉線（八代～人吉間）を利用して、６月13～17日人吉の鍋屋に投宿。（16日は五木村頭地泊）そして人吉からそのまま南下して18日に鹿児島県入りし、鹿児島明治館に18日～21日まで投宿。薩摩半島の川内、加世田、枕崎、指宿を回り、再び鹿児島明治館に戻り、29日及び７月１～２日滞在の後、７月３日都城（持永旅館）へ向った。さらに志布志町、日南市飫肥及び鵜戸神宮を経て宮崎の神田橋旅館に９～10日投宿、11日富高（日向市）に到着した。翌12日富高を出発し、途中南郷村（現美郷町）神門で1泊の後、柳田が初めて椎葉村へ足を踏み入れたのは1908年（明治41）７月13日のことであった。

柳田の椎葉入りルートについては、それまでは



田山花袋に宛てた柳田の絵葉書
（1908年７月31日付消印）

宮本常一の説、即ち南郷村神門から鬼神野を通り、一旦椎葉村の栂尾地区中山に入り、そこから中山峠を越えて間柏原に出て、直接村の中心地である上椎葉、桑弓野地区へ向かったというのが通説であった。しかし、椎葉での一日目の投宿先が下松尾の松岡久次郎邸（旧庄屋）であったことが判明したことにより中山峠ではなく、当時椎葉村の松尾と南郷村の神門との交易ルートであった所謂「駄賃つけ」*の道を通り、椎葉村と南郷村の村境の笹の峠を越えて、椎葉村に足を踏み入れたことが解明された。

柳田の椎葉での一週間の旅の行程及び宿泊場所は、次のとおりである。

７月13日	椎葉山中松尾村	松岡久次郎邸
14日	桑弓野	黒木盛衛邸
15日	大河内	椎葉徳蔵邸
16日	不土野	那須源蔵邸
17日	桑弓野	黒木盛衛邸
18日	椎原	那須鶴千代邸

７月19日、柳田は胡麻山から胡桃峠（国見峠）を越え、鞍岡を経て熊本県馬見原に到着する。そして三田井（高千穂）、竹田を経て別府（22日～24日）、長門を経て広島（26日～30日）、さらに松山（31日）へと続くのである。

５．「柳田国男100年の旅」

この柳田国男の椎葉来訪100周年を記念した今回の企画は、当初、民俗研究家の江口司氏（熊本県を拠点として九州民俗学のフィールドワークを実践）をメインとして、黒木勝実氏と、「霧立越の歴史と自然を考える会」の会長秋本治氏の３名で進められた。新聞社等への掲載依頼や参加者募集等具体的な運営がいよいよスタートした矢先、４月１日、突然悲報が届いた。熊本県宇城市三角町で釣りをしていた江口氏が岩場に転落し死亡したという知らせだった。企画の柱にと予定していた江口氏の突然の死に、黒木、秋本両氏は企画の続行か、中止かの選択を迫られた。悩んだ末に両氏は企画の一部を練り直して実行することにした。初日予定していた江口氏による基調講演を、宮崎公立大学の永松敦教授（元椎葉民俗芸能博物館主任学芸員）に、江口氏に代わるパネリストとして綾部正哉氏（元宮崎県教育委員会教育調整監、綾心塾を主宰）にお願いした。それが亡くなられた江口司氏の遺志でもあるとの判断に基づいての決断だった。

６．おわりに

宮崎演習林のような遠隔地にある附属施設は、大学という一組織の力だけで円滑な管理運営を行っていくことは到底難しい。その設置の経緯からして当初から地元行政機関や、とりわけ地域の有名無名の住民の方々の温かい支援に支えられている。そして、70年を迎えることができた。その中には、永年にわたり森林監守の任にあたっていただいた方もいれば、また戦後学生実習が始まってからは、忙しい農作業などの時間を割いて、学生達の賄いに従事していただいたご婦人方もいる。さらに地元消防団の方々など数え上げれば枚挙にいとまがない。それは今後とも変わることはないであろう。

〔注〕

「駄賃つけ」とは、カジ皮やシイタケや山茶といった林産物を牛馬の背に積み、峠を越えて熊本や延岡の市場に運び、戻りにも酒や塩や衣類などを乗せて双方から駄賃をもらう業種。椎葉と他の地域を結ぶ

ルートとしては、神門口、馬見原口、球磨口、米良口と四つの方面から相互の交易が行われていた。

〔参考文献〕

柳田国男著『故郷七十年』（朝日選書７）、朝日新聞社（1974）。
柳田国男抄訳『後狩詞記』、椎葉村教育委員会（1993）。
江口司著『柳田国男を歩く―肥後・奥日向路の旅―』、現代書館（2008）。
夕刊デイリー紙連載：「柳田国男・椎葉来訪から100年」１～92（2008.7.3～12.30）。
黒木盛衛没後50年記念誌編『軌跡』、黒木盛衛没後50年祭準備委員会（1993）。
椎葉村編『椎葉村史』、椎葉村（1994）。
九州大学演習林九十年史編集委員会編『九州大学演習林九十年史』、九州大学農学部附属演習林（2002）。
九州大学農学部附属宮崎演習林編『九州大学宮崎演習林50年のあゆみ』、九州大学農学部附属宮崎演習林（1989）。

（九州大学農学部宮崎演習林）

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長		副学長	今西祐一郎
委員	人環院	教授	新谷　恭明
〃	文書館	教授	折田　悦郎
〃	人文院	准教授	山口　輝臣
〃	経院	准教授	北澤　満
〃	理院	准教授	鹿島　薫
〃	工院	准教授	水永　秀樹
〃	芸工院	准教授	大島　久雄
〃	薬院	准教授	濵瀬　健司
〃	生医研	教授	中山　敬一
委員	比文院	教授	吉田　昌彦
〃	言文院	准教授	高橋　勤
〃	先導研	教授	三島　正章
〃	健セ	教授	山本　和彦
〃	高セ	准教授	小湊　卓夫
〃	図書館	館長	丸野　俊一
〃	博物館	館長	多田内　修
〃	総務部	部長	渡邉　廉
〃	図書館	部長	濱﨑　修一

（2008年12月31日現在）

九州大学大学文書館名簿

館長		副学長	今西裕一郎
副館長	人環院	教授	新谷　恭明
専任教員		教授	折田　悦郎
兼任教員	人文院	教授	佐伯　弘次
〃	法院	教授	植田　信廣
〃	法院	教授	熊野　直樹
〃	比文院	教授	有馬　學
兼任事務職員	総務課長		大土井　智
〃	法令審議室長		百﨑　義隆
〃	総務第二係長		山下　和成
事務職員			中村　俊郎
事務補佐員			松尾　陳代
〃			筑紫　啓子

（2008年12月31日現在）

大学文書館日誌抄録（2008年１月～2008年12月）

１．９（水）医学部同窓会より資料寄贈。
１．10（木）読売新聞社より電話取材（「九大紛争」の件）。
１．15（火）朝日新聞社より電話取材（旧法文学部の件）。
１．16（水）塩川郁夫氏来館、資料寄贈（５月26日も同様）。
１．17（木）西日本新聞社記者、取材のため来館（箱崎キャンパスの件。８月26日も同様）。
１．22（火）福岡大学75年史編纂室より大学創立の件につき照会、回答。
１．28（月）獨協大学教授、大学文書館視察のため来館。

1．29（火）大東文化大学大東文化歴史資料館より大学文書館視察のため来館。
2．1（金）福岡工業大学教授、福岡県立大学教授等、資料調査のため来館（2月21日、28日、3月6日、21日、27日、28日、4月11日、6月20日、7月2日、16日、8月20日、22日、9月3日、12日、17日、24日、10月1日、22日、29日、11月6日、26日、12月10日、17日も同様）。
尾崎敏氏・中里公哉氏より資料寄贈。
2．6（水）本学卒業生による「学徒出陣に関する座談会」開催（有馬學教授、折田悦郎教授参加）。
福島大学教授、大学文書館視察のため来館。
2．22（金）長崎大学教授、大学文書館視察のため来館。
2．25（月）猪城博之名誉教授より資料寄贈。
2．29（金）施設部より資料移管。
3．3（月）折田教授、東北大学史料館視察（～4日）。
3．6（木）大阪大学文書館設置準備室より大学文書館視察のため来館。
3．7（金）高崎経済大学附属図書館より大学文書館視察のため来館。
3．11（火）文部科学省大臣官房文書管理班より大学文書館視察のため来館。
3．13（木）有馬教授、折田教授、国立台湾大学校史館、図書館視察（～15日）。
3．19（水）福岡市東区役所企画課（東区施設見学会）より箱崎キャンパス見学のため来学（40名、折田教授案内）。
3．24（月）九州大学百周年記念事業経理部会開催（折田教授出席。6月16日も同様）。
3．31（月）『九州大学大学史料叢書』第16輯、『九州大学大学文書館ニュース』第31号刊行。
4．1（火）中村俊郎氏（前貝塚地区事務部財務課長）再任用。
4．8（火）新採用職員研修オリエンテーリング（「大学文書館で歴史に触れよう」、折田教授案内）。
4．16（水）2008年度前期「大学とはなにか―ともに考える―」開講。
4．18（金）大学院比較社会文化研究院教授、資料調査のため来館（5月30日、8月7日、10月28日も同様）。
4．22（火）ＲＫＢ毎日放送より電話取材（旧制福岡高等学校、田島寮の件）。
4．23（水）折田教授、「新キャンパスを科学する」（個別教養科目）の一環として「九州大学史と新キャンパス」を講義。
4．28（月）第7回九州大学大学文書館委員会開催。
5．1（木）湯地丈雄顕彰会主催「亀山銅像建立とその時代の九州大学」講演会開催（於よみうりプラザ。折田教授「九州大学の草創期」講演）。
5．9（金）番組企画・制作会社ＳＯＷより資料調査のため来館（九大フィル・ハーモニーの件。6月5日、6日も同様）。
5．22（木）共同通信社記者、取材のために来館（「九大紛争」の件。23日も同様）。
5．28（水）さようなら六本松誌編集委員会開催（折田教授出席、7月18日、12月29日も同様）。
5．31（土）新谷恭明教授、折田教授、「「紛争」期の九州大学史を考えるシンポジウム」に参加。
6．9（月）全学教育科目教養教育科目コアセミナーの一環として、文学部より学生等来館（20名、折田教授案内）。
白石節子氏、阿部利行氏より資料寄贈。
6．25（水）福岡市総合博物館学芸員、資料調査のため来館。
7．3（木）九州大学医学部同窓会史料・史跡保存委員会開催（折田教授出席）。
7．4（金）折田教授、西鉄百年史編集事務局視察。
7．6（日）和田充子氏より資料寄贈。
7．14（月）比較社会文化研究院教授、資料調査のため来館（8月18日、20日、10月21日、30日、11月10日、12月4日も同様）。
7．15（火）九大フィル・ハーモニーより資料寄贈（9月18日も同様）。
7．16（水）倉谷重嗣氏より資料提供。
7．18（金）米子工業高等専門学校講師、資料調

査のため来館（８月４日も同様）。
7．22（火）中村元臣名誉教授より資料寄贈。
8．２（土）折田教授、九州大学文学部同窓会にて講演（「九州大学六本松キャンパスの歴史―旧制福岡高等学校・九州大学教養部を中心にして―」。於六本松キャンパス）。
8．７（木）東京大学大学院生、資料調査のため来館（８月11日も同様）。
8．19（火）西日本新聞社記者、取材のため来館（旧制福岡高等学校展開催の件）。
8．20（水）旧制福岡高等学校展開催（～22日。於中央図書館）。
8．22（金）折田教授、九州大学附属図書館第11回貴重文物講習会にて講演（「旧制福岡高等学校関係資料について」。於中央図書館）。
9．22（月）九州大学百年史編集委員会開催（新谷教授、折田教授出席）。
9．25（木）西日本新聞社記者、取材のため来館（六本松キャンパスの歴史の件）。
10．３（金）総長室より資料受領（12月19日も同様）。
「九州大学の歴史」（少人数ゼミ）開講（折田教授）。
10．６（月）朝日新聞社記者、取材のため来館（箱崎キャンパス建物の件）。
10．８（水）ＲＫＢ毎日放送記者、取材のため来館（箱崎キャンパス建物の件）。
荻野喜弘名誉教授より資料寄贈。
10．14（火）朝日新聞社記者、取材のため来館（六本松キャンパスの件。15日も同様）。
10．15（水）工学部等事務部より資料移管。
10．22（水）副島健氏より資料寄贈。
11．５（水）読売新聞社記者、取材のため来館（六本松キャンパスの件）。
11．６（木）アジア総合政策センターより資料調査のため来館（11月12日、14日、12月３日、４日も同様）。
11．12（水）折田教授、2008年度全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会及び研修会に参加（～14日。於奈良ロイヤルホテル等）。
11．22（土）第３回「ホームカミングデイ」の一環として、「九州大学の歩み写真展」、「吉川幸作墨彩画展」、講演会「六本松キャンパスの歴史―旧制福岡高等学校と九州大学教養部を中心に―」開催。
六本松記念絵葉書作製。
12．１（月）テニス部ＯＢ中山宏明名誉教授等来館、資料寄贈。
12．２（火）第８回九州大学大学文書館委員会開催。
後藤賢一元教授より資料寄贈。
12．５（金）九州朝日放送より電話取材（六本松の歴史の件）。
12．８（月）第９回九州大学大学文書館委員会（書面回議）。
12．９（火）米澤洋氏より資料（米沢吾亦紅関係）寄贈。
12．11（木）ふくおか経済社記者、取材のため来館（六本松キャンパスの歴史の件）。
12．24（水）学務部教育支援課（六本松地区事務部）より資料移管。
12．26（金）古川洽次氏より資料寄贈。

九州大学大学文書館ニュース　第32号
Kyushu University Archives

発行日　2009年３月31日
編集
発行　九州大学大学文書館
〒812-8581 福岡市東区箱崎6－10－1
Tel:092-642-2292　Fax:092-642-7646
印刷　株式会社ミドリ印刷